

秋 山 徹

7月4日（月）～5日（火）に教団常議員会が、また5日（火）～6日（水）に教団の東日本大震災救援対策委員会が開かれ、それぞれの会で関東教区の被災状況などの報告をするとともに、奥羽、東北の各教区の被災状況やそれぞれの対応について聞く機会を持ちました。常議員会で決定された重要なことは、日本基督教団としての取り組みの全体像が示されたことです。主題は「地域の人々に仕える教会の再建を目指して」で、聖句は「わたしたちの助けは、天地を造られた主の御名にある」（詩編124：8）。救援・支援活動として、（1）教会の被災状況調査、（2）救援募金、（3）支援体制の構築（教区の状況に合わせてサポート・センターやステーションを設ける）、（4）放射能汚染に対する総合的な対応、（5）具体的な支援活動（①教区内の施設を開放して避難生活が困難な家族を受け入れる、②ボランティア派遣、③物資供給、④子供支援、（6）広報活動（教団公式ホームページ、教団新報等による）が展開されます。

特に（2）の救援募金について、特に、これから関東教区でも総力を挙げてこれに取り組まなければなりませんからよく心にとめておかなければなりません。このたびの大震災の救援のために、これまで教団社会委員会と関東教区と二つの窓口で募金してきましたが、これは6月末日を持って終了し、これ以後は教団の募金に一本化します。関東教区に寄せられた献金は、2914万1108円に及び、それぞれの教会で、また個人・団体に強い関心を持ってこのことと取り組んでくださったことを感謝いたします。この献金は、すでに被災教会の被害状況調査や緊急の補修のために用いられているものもありますが、その他はこれからの本格的な再建・復興計画のために用いられます。

教団の募金計画は、国内からの募金と海外からの募金の二つに分かれており、海外からのものは、主として教会の再建のためというより地域の復興のために震災遺児や被災した幼稚園・保育園などの再建、被災住民の心のケア、グリーフ・ワーク、教団スタッフによる救援活動などに用いられ、目標額は15億円です。国内の教会からの募金は主として被災教会の会堂再建・補修、被災地域のキリスト教学校への支援、被災地域で教会が行う支援活動、被災した信徒、外国籍の人への支援などに用いられ、目標額は10億円です。募金期間は2011年7月～2015年3月31日の5年間となっています。

関東教区として、会堂の全面建て替えを要する教会、大規模の補修を要する教会があり、それぞれの教会の被災状況の調査や再建を目指して各教会の役員会の話し合いにも教区三役も加わって協議を進めていますが、その他の今のところ概算で2～3億円程度と見込んでいます。このたびの委員会で奥羽、東北各教区の被害状況の報告では、特に宮城・福島を含む東北教区での会堂被害の規模が大きく、全面建て替えや大規模補修を要する教会がかなりあり、再建のために多額の費用を要します。この10億円の募金目標を達成しなければ、何もできないこととなります。中越地震、中越沖地震によって被災した教会の復興に力を尽くした関東教区が、また同じ程度の宣教拠点の確保のために働かなければなりません。教会は私たちが建てるものではなく、主イエス・キリストが建てられます。必要なものは主が備えてくださるのです。主のご意思にわたしたちの心を合わせる時に、私たちに不可能と思えることも可能になる、このことを信じて心を合わせましょう。

水戸中央教会の復興に向けて

山本 隆久（水戸中央教会牧師）

水戸中央教会は、半壊、危険建物と診断され、牧師家族は、隣の賃貸アパートに4月より住んでいる。家賃は関東教区よりの支援を頂いている。すぐに危険部分を取り壊すようにと助言を頂いていたが、荷物の整理がはかどらず、7月13日よりようやく解体工事開始にこぎつけた。教会員も随分年配だが、荷物の整理をよくしてくださった。また大洗ベツレヘム教会のインドネシアの人々も30名ほどで、整理を手伝って下さった。彼らの支援がなかったらと思うとぞっとする。

6月26日に臨時総会が開かれ、再建建築委員会が立ち上げられた。特に順調にしている訳ではない。牧師である私の不手際も多い。水戸中央教会は、牧師館、旧幼稚園、礼拝堂が、一体型の建物である。まず損傷の激しい、建物前部、牧師館と旧保育室の一部を取り壊す。礼拝は、残っている礼拝堂で守る。取り壊した跡地に礼拝堂などを再建した後、残存する礼拝堂部を取り壊し、牧師館を建て、駐車場を建物裏側に整備する計画である。これまで、礼拝堂が敷地の一番奥にあり、新来会者が非常に入りにくいという指摘があったため、礼拝堂を道路に面して建てることになった。

祈り覚えてくださっている茨城地区、関東教区そして日本基督教団および多くの人々の温かい励ましの声と支援を心より感謝している。

今回の再建計画の中心に納骨堂の建設がある。これには近隣の了解や行政の承認が必要でなかなか難しいがぜひ実現したいと思っている。お祈り頂きたい。

日本でキリスト教伝道が進まない一つの原因は、江戸時代以降からあるキリスト教迫害のために構築された檀家制度などの社会構造にある。近年、寺での葬儀を経ないで、火葬場から墓へ直接葬る「直葬」なるものが増えてきているという。また樹木葬や海に散骨するなど、檀家制度はすでに崩壊しつつあるが、地方では根強く残っている。中世、キリシタンの急激な増加は、キリスト教が身分や貧富の別なく、丁重に死者を葬ったことにあると聞いたことがある。また私のわずかばかりの牧会経験の中でも、葬儀は人々を悔い改めに導く最も力ある伝道場である。クリスチャンならば誰でも知っているような「砂浜の足跡」というようなたとえ話を「初めて聞いた」と感動される方が多い。永遠の命をもたらす福音が、死の悲しみの中に慰めをもたらすのは当然のことだ。アブラハムが約束の地に取得した最初の土地は、マクペラの洞穴であり墓であった。異教社会の中で信仰を守って生きて行くためには墓は重要な役割をもっている。このことを私たちは軽視してきたのではないか。近年、大都市ではまるで西欧の教会のような寺が運営する納骨堂があり、無宗派で市内にあり、行きやすく好評を博している。ところが地方教会で墓を所有している場合、とんでもない山奥の辺鄙などところにある場合が多い。この欠点を補うような納骨堂が水戸市の中心部にある水戸中央教会に建てられればと願っている。

